

第34回夏期福音特別集会 (2) (箱根)

主の祈り

――マタイ伝第6章1～34節――

1987年8月22日

小池辰雄

一極絶対 祈りは反射 十字架の門 隠れたるに見給つ 言葉はみな暗号 一対一の伝道をせ
 んがため 鳥のように走る 地上に在りながら天人 自分に対しては「否」 アポストーリッ
 シュ(使徒的) 十字架で徹底的に赦されて キリストを食べる 骨肉に身をかくさざる ア
 ナンケー(ざるを得ない) 神眼 大詩人よ、出よ! 一日を永遠として ベートーベンの祈り
 祈り入り、帰り入る

【マタイ6】

1 汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、
 天にいます汝らの父より報を得じ。

2 さらにば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為す
 ごとく、己が前にラッパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を
 得たり。3 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。4 是
 はその施濟の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕さんとて、会
 堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその
 報を得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたる
 に在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。
 7 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きにより
 て聴かれんと思ふなり。8 さらにば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、な
 んじらの必要な物を知りたもう。9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます
 我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。10 御国の来らんことを。御意
 の天のごとく、地にも行われん事を。11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。
 12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。13 我ら
 を嘗試に遇せず、悪より救い出したまえ」14 汝等もし人の過失を免さば、汝
 らの天の父も汝らを免し給わん。15 もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失
 を免し給わじ。

16 なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。……
 19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人う



がちて盗むなり。²⁰ なんじら己がために財宝を天に積み、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。²¹ なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。²² 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。²³ 然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。²⁴ 人は二人の主に兼事うることを能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うることを能わず。²⁵ この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。²⁶ 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。²⁷ 汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。²⁸ 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。²⁹ 然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。³⁰ 今日ありて明日、炉に投げ入れらる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。³¹ さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。³² 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。³³ まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。³⁴ この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。

●一極絶対

今日はマタイ伝の第6章、祈りが中心のところですよ。

1 汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

イザヤ書42章のところに、これはエホバの僕の第一の歌ですが、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。

これは素晴らしい言葉です。キリストはこれを全部ご自分のこととして読まれたわけですが、しかも、

2 かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず、³ また傷める蘆を折ることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく、真法をもて道をしめさん。」(イザヤ42・1～3)

こういう姿がキリストの一番深い姿なんです。少しもやかましくない世界です。このマタ



イ伝6章の始めを読むと、イザヤ書42章のそこを私は思い出す。

2 さらば施済ほどこしをなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街ちまたにて為すごとく、己が前にラツパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報むくいを得たり。3 汝は施済をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。4 是はその施済の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。素晴らしい言葉です。

私たちには左右がある。

「右の手のすることを左の手に知らすな、

左の手のすることを右の手に知らすな」

これは一極絶対の世界なんです。右の手を使っている時には右の手しかない。左の手を使っている時には左の手しかない。そのように、一極において絶対を見ている。絶対というのは対を絶するということ、相対を絶するということです。そういう在り方がキリストの魂の在り方です。我々の言葉も行為もみな一極絶対なら、これが本ものになる。キリストが嫌いだっただのは

「偽善なる学者・パリサイ人」びと

です。自己義認、自己主張、観念の世界です。

パウロは、サウロの時にそのチャンピオンだった。キリストが一番やつかい者とされたのが、このサウロというやつです。ところが、サウロもそういうやつだけれども、彼はとにかく一生懸命だ。キリストはその一生懸命の質を変えるわけです。

「自己に執した一生懸命はダメだ。どんなにその内容がよくてもダメだ」

ということ。サウロは、

「律法の義につきては責むべきところなし」(ピリピ3:6)

と言って、自ら誇っていた。しかし、パウロはキリストに救われてから、

「これを塵芥ちりあくたのごとく思う」(ピリピ3:8)

と言った。180度どころの騒ぎではない。はつきり、次元の完全な相違になってしまった。福音は我々をそのようなことにするわけです。だから、福音は、簡単には受けとれない。ご利益信仰で、「ワツシヨイ、ワツシヨイ」なんてのと違う。そういう世界と違うんだ。向こうが何万人いようと、こちらはビクともしない。

● 祈りは反射

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報むくいを得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在います汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。



これが祈りの一番深い世界です。本当の奥義の世界、神秘の世界です。

「キリストはイザヤ書を本当に身に付けていらつしやった方です。旧約聖書の中心はイザヤ書です。ルターは「詩篇」と言ったけれど、私は「イザヤ書」と言いたい。詩篇は勿論ある意味において、

「小さな聖書」

と言つていいけれども。

こちらからの祈りの世界が詩篇ですが、預言書は上からの迫りの世界です。祈りというのは、実は反射なんです。こちらから祈っているなんて言つたつて、上からのものが来なければ、本当の祈りにならない。

「隠れたるに在す神」

これもイザヤ書にある。

「¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」

(イザヤ45・15)

マルチン・ルターが好きなところですよ。神さまは隠れている。見えない。あんた方、空気は隠れていないと思うけれど、空気が見えますか？ 空気は見えない。空気は非常に顕然として在りながら、隠れている。見えない。そのように、神さまは遍在したもう。遍在なんて言うのと、すぐ

「汎神論だ」

なんて下らないことを言う。観念的な論なんてものは問題ではない。神さまはいたる所にいらつしやる。

「戸を閉じて」

これは目を閉じてということですよ。我々は目を閉じれば「戸を閉じて」ということになる。祈る時に自然に目をつぶる。私は大体、夜祈るんだけど、静かな時にただ一人で祈る。

「神―キリスト―我」

が一对一の関係になる。そこが一番深い世界です。その祈りは沈黙の祈りです。聖句が湧いてくる。ある時は聖句を製造してしまう。作らされてしまう。沈黙ですが、その質は叫びです。あるいは、叫びを越えた全身の投入なんです。だから、十字架を通して、すぐキリストの中へ入つてしまう。

● 十字架の門

「我は門なり」(ヨハネ10・9)

と言う。キリストという門は門構えに十の字、

「閉」

だから。十の字を忘れては困る。大漢和辞典にも出て来ません。これは私が造った字だ。



この十字架の門を通ってキリストの中に全存在を投げ込む。あるいは、磁石みたいに吸い上げられてしまう。本当ですよ。そういう祈りの体験をしないうちはダメなんだ(異言)…。だから、キリストは、

「静かに深く祈れ」

と言う。静かに深く祈った祈りの世界で本ものになると、ささやきの祈りであろうと、叫びの祈りであろうと、自由自在になる。皆でもって

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」

と、大きな声で祈るのが祈りではない。

「それでない、なにか寂しくなって、一人になるとダメになる」

なんて、それではダメなんだ。一人の時こそ一番すぐくならなければ。あなた方一人ひとりがそういうことになったら、この召団は何が来てもびくともしない。どこの教会であろうと、本ものは皆そのようなものを持つているはずですよ。

●隠れたるに見給う

普通は、「主の祈り」と言つて、皆、

「御国を来たらせたまえ……」

と、そればかり暗記してやつている。それでは空念仏になる。大事なのは、その前の、前提のこのキリストの言葉なんです。いわゆる「主の祈り」は、

「たとえば、こんなふう祈りなさい」

という、「たとえば」なんだ。大事なのはその前の、

「隠れたるに見給う、隠れたるに聞き給う」

という、キリストの言葉です。

「二人で祈つていては力が来なくて困る」

なんて、何を言つてるか。どこから力が来るか。人から力が来るのではない。キリストから力が来る。

「千万人といえども我行かん」

と孔子が言ったけれども、我々は孔子の言葉をちゃんと本当に身に付けて言えるんです。女の方であろうと誰だろうと。

いつ如何なる時、どこにおいても、キリストは一番近い所におられる、誰よりも近いところ。もう楽でしょうがない。私たちに一番近いのは何か。空気ではないですか。空気から離れることができますか。大体、知らないうちに空気を吸っている。キリストは「気」、霊気なんだ。気というのは面白い言葉だ。言は響きです。響きの元は気、霊だ。だから、

「わが言は響きなり、生命なり」

という。キリストの言は歌のごとし。キリストの言にはどんなリート(歌)もかなわない。



これは本質的に歌ですから、詩ですから。風の如く。

7 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思うなり。8 さらば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。

「異邦人のように、繰り返したり、ただ言葉が多いことがいいと思ったり、そんなことではないぞ。簡単に祈れ」

と。時々長い祈りをされると、私は途中で

「やめよ！」

と言いたくなることがある。祈りの世界であんまり説明されては困る。長短は問題ではない。「短くないと先生に叱られる」

なんて、そんなことではない。「先生」ではないんだ、相手はキリストなんだから。ある時は長く祈ったついでいい、ご勝手です、ひとつも律法ではないんだから。けれども、キリストの言の本質は読めていかなくはいかん。そういう意味で、実はこの「主の祈り」の前のところは大事なんです。

キリストの前には「0」、それが本当に「1」なんです。キリストの前に「0」になると、これは本当に「1」にされる。そうすると、キリストの無限大(∞)が入ってくる。

「0=1=∞」

と、こういう式ならざる式だ。そうすると、「我」が今度は本当に「我ら」になる。そういう我らです。個に執した個ではない。無限大を持つ1ですから、これが2でも3でも10でも100でも、自由自在になる。

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ……」

私がドイツの教会に行った時(1961～1962年)、やっぱりドイツ人も、みんなこれをやっているんだ。私は何も言わないものだから、

「プロフェッサー小池はなぜ言わないのか？」

と聞くから、

「私は皆と一緒に暗唱するのは余り好きではない。自分で勝手に祈る時に、その中に主の祈りの一節や二節が自然に出てくる。それでいいと思っている」

と、はつきり言つてやった。相手がマルチン・ルターの国であろうとも、プロテスタントなんて言つても、今はダメだからね。自分自身にプロテストしてかかって行かなければダメなんだ。それをやってない。

ルターが嘆いているわ。せっかく聖書をルターが訳してくれたのに、みんな聖書を教会に持って来ない。教会に聖書も讚美歌もみんな備えてある。それをみんな借りて、帰りは手ぶらで帰ってくる。それで、私は言ったんだ。

「何事だ。ルターは何のために聖書を訳したんだ。あなた方が炉辺で本当に読み、



自分の身体の一部分とするように、ルターが訳したのではないか。みんな自分の聖書を持って来い」

と。プロフェッサー小池がそう言ったなんて、牧師が会員に言ったけれど、相変わらずさっぱり持つて来ない。それで、その教会へ行くのが嫌になった。けれども、私は五、六回、ビーベル・シュトゥンデ(聖書の時間)の時にお話してやったら、

「どうしてそういう心境になったか?」

と聞くから、

「聖霊のバプテスマが大事なんだ」

と、はつきり教会新聞にも書いてやった。そんなことですからね。

●言葉はみな暗号

「天」はもちろん霊界の天です。我々は五感を持っているから、天を仰いで「天」と言ってもそれはいいんだけど、その青空の天を目は見えていても、霊界の天を魂は見えていなくてはいかん。

キリストは、「父よ」と仰るけれども、なにもヒゲの生えたお爺さんを連想しているわけでも何でもない。言葉はみんなそういう暗号ですから。しかし、人間は具体的な存在だから、具体的な表現をするしか仕方がない。神さまのことを、具体的にいろいろなことを言っているでしょ。鼻の息だとか、手だとか、足だとか。そうすると、旧約では偶像を造ったかと思うと、一つも造つてない。そういう具体的な表現をしながら、一つも偶像的な物を造らない。そこがイスラエルの宗教の健全な歩みなんです。仏教のひとに言わせると、

『父よ』というのとは何かお伽噺おとぎばなしみたいで神話的だ」

と言う。しかし、神話的表現で何が、その内容が言われているかということに気が付かなかつたら、しょうがない。

キリストは神さまを

「天にいます我らの父よ」

と仰る。キリストでは、霊の世界と人格の世界が渾然としている。

いま日本で一番欠けているのは、この霊的人格或いは霊的人物です。霊的人物が欠けている。暁あかつきの星より少ない。私は東京で電車に乗っていて、たくさん人がいるわけだが、いたいこれは本当に「ひと」だろうかと思う。本当だよ。情けないなあと思う。

「ひと」とは霊たまが止まる

「霊止たまどまり」

と書く。神霊が止まっているのを霊止という。私も長い間、この霊止たまどまりでなかった。「霊止でなし」という。あなた方、これから「ひと」とは「霊止」と書くといい。



● 一対一の伝道をせんがため

これは本当に

「福音を伝えなければならぬなあ」

と思う。こういう集会が、あなた方が一対一の伝道をせんがための、その下準備なんです。一人の人をも天国人に導いてやらなかった人は、天国に入ろうとしたら、

「ちよつと待て。もういつぺん、地上に帰れ」

とキリストに言われるかも知れない。それくらい救われた者は人を救う義務がある、課題がある。

「救われた、めでたし、めでたし、ハレルヤ、ハレルヤ」

ではないんだ。人を見て、

「この人はなんとかして助けてやりたいなあ、その肉体も、その魂も」

と思うことがあるでしょ。その時に御霊が来てなかったら、どうにもならないんです。だから、聖霊を受けなければ、本当に救われてないし、本当に救われれば、必ず人にまた、その聖霊を分かたぎるを得なくなる。

それをしなかつたら、この十二召団は解散だ、サヨナラだ。私は自分の、武蔵野の集会を3回解散したことがある。

「何をしてるか!」

と。そうすると、来年は皆一人ずつ連れてきて、会場にもう入り切れない。いいよ、入り切れなくても。それくらいな意気込みでやってください。

「一生懸命でやりましたが、とうとう一人も救えませんでした」

と。いいよ、それはそれでも。神さまは人の心を見給うから。いい加減なやつを連れて来たってダメだよ、

「とにかく連れて来ました」

なんて。

そういう意味で、我々は特別集会をやっているわけです。ここでもって本当の力が入れれば、本当にキリストと一つになれば、動かざるを得ない。

「世界を動かさんとするならば自分自身が動け」

と、これはソクラテスの言葉です。

キリストは言葉を発しようが、手足の行動に出ようが、全部同じなんです。ただ口で言葉になっただけの話、身体で動くようになっただけの話です。だから、

「起きよー!」

と言え、ラザロが甦るではないですか。言葉がものすごい力を持っている。行動力を持った言葉です。意味の言葉ではない。「聖書研究会」なんてのは意味ばかり詮索してる。あんなことをやってると、だんだん聖書がわからなくなる。本当だよ。聖書身読会、身からだで



読めということですよ。

●鳥のように走る

「在天の御父さま……」

と呼び掛けると、キリストは「父と一つ」になってしまふんです。

「天にいらつしやるから大分遠いな」

なんて、そうではない。グーツとキリストは天界に、キリストと神さまとは一つになってしまふ。

だから、私は人間でなければ、鳥になりたい。祈りの世界では鳥のように走ってしまう。その人のために祈ろうとなれば、魂はその人のところへスーツと行くよ。だから、具体的にお訪ねしないと、祈りが具体的ににならない。その人のたたずまいが現れて来るから。入って、一緒に祈ってることになってしまふ。遠くで祈っても、遠隔祈禱なんて言ったら、本当は遠隔ではないんだ。この祈りの世界は時間空間を超越したような物凄い世界だ。霊界のひととの祈りもキリストを通してできますから。私の兄貴なんか近いわけだ。

9……「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。」

そこまでは特に縦の関係が強くてている。神の「御名」は我々にとっては「キリスト」という御名だ。ペテロが、

「我が中にあるものを汝に与う。ナザレのイエス・キリストの御名にあつて歩

め」(使徒行伝3:6)

と言ったら足菱が立ち上がった。使徒たちにとっては「キリスト」は御名なんだ。キリストの御名が直ちに実力なんだ。聖霊の世界でなければ御名が実力にならない。悪鬼がいたら、

「キリストの御名によって命ず、いでよ!」

と言えは出ていく。私はその体験をしている。

「御名の崇められん事を」

は直訳すると、「崇められん事を」ではない、

「御名の聖とせられん事を」

です。「聖」という字は「カードーシュ」というヘブライ語です。イザヤがやはり、エホバの神のことを「聖者」と言った。ところが、この聖者は、ただ高くとまっているような、そんな聖者ではない。イザヤ書の57章15節。こういう大事な言葉は忘れないでください。今度の著作集第十巻にも、このところを勿論書きました。

「いと高きいと上なる永遠にすめるもの聖者となづくるものかく言い給う。

我は高き所きよき所にすみ、またこころ砕けてへりくだる者とともにすみ、

謙だるものの霊をいかし砕けたるものの心をいかす。」(イザヤ57・15)

という素晴らしい言葉がある。



「ペシヤンコになって砕けた、そういう者と一緒にいるんだよ」

と。「いと高きもの」は、いと低きところに、どん底にやつてくる。何のために来るかという、贖^{あがな}わんがためです。だから、「聖者」と「贖い」という言葉がよく対になってイザヤ書の中に出て来ます。

「御名の聖とせられん事を」

の「聖なる御名」は私たちを聖なる世界に贖い入れる。神とキリストと同質にさせてくださる。しまいには、もう肉体まで全部、永遠の生命でしょ。霊肉^{こんぜん}渾然として救われることが、本当の救いでしょ。こんな大胆な救いなんてものは、人間の思想では出て来ない。

●地上に在りながら天人

それで、第10節になると、

¹⁰御^み國^{くに}の来^{きた}らんことを。御^み意^{こころ}の天のごとく、地にも行われん事を。

直訳すると、

「あなたの御意が成し遂げられん事を、天における如く地においても」

ということになる。天上では御意はもうすべて直接に成っている。御意が成っている世界です。ところが、地上では人間の罪のために、どうもなかなかそれが成らない。

「天で成っている事が地でも成るように、地においても行ぜられるように」

天成^{てんせい}、地行^{ちぎやう}ということ。これはただ祈ったってダメなんだ。これは「主の祈り」の中で一番大事なところです。まず、天なる神・キリストの中に自分を投げ入れて、地上に在りながら、天人^{てんじん}とならなければダメなんだ。天の人に。天国^{てんこく}人に。

マタイ伝は天国という言葉が非常に出てくる。

「恵福なるかな心の、霊の貧しき者、天国は汝らのものである」

と。神の御意の行なわれるところがすなわち天国です。よく、

「神の支配するところ」

なんて普通の神学書に書いてある。ただ「支配」なんてなことではない。御意が行なわれるところが天国なんです。ああいう観念的なことを言って、みんなそのつもりでいるから困る。ただ、支配だなんて。ドイツ語でもヘルシャフト(支配、統治)なんて書いてある。あなた方は自分の魂で聖書を読みなさいよ。

私がどのように福音を掴^{つか}ませられているか。それを受けると、その人を通してまた創造的なものがどんどん展開していく。そのために、私の本は読んでください。福音の世界は無限の展開をして行くんだから。

「先生と同じように考えなくてはいかん」

なんて、そんなことは一つもない。

そうすると、地上において天国人に、地上が天国、天みたいになるから、天地一如になる。



大空と地は接しているではないですか。大空は地面の表面まで来ている。天地一如の世界だ。とにかく、区別のない世界なんだ。

「私がお前か、お前が私か」

と、わからないような世界が本当の世界なんだ。友情も、恋愛もそうでしょう。そういうように、一つになっている。

我々兄弟姉妹というのは文字どおりそうなんです。兄弟姉妹は一つ。一つだけれども、いわゆる全体主義ではない。それぞれの特色を大いに持っている。そういうことがわからなくて困る。いわゆる間違った自由主義でも、間違った全体主義でもない。いわゆるイデオロギーはみんな強張こわばつてしまうからダメなんです。柔軟というのはそういった弾力性のあることを言っているの、いい加減ということではない。禅宗でも

「柔軟心」

なんて言うでしょ。

● 自分に対しては「否」

「汝の御意を為す」

ためには、こちらの意は捨てられなければならない。神・キリストに

「然り、はいっ」

と言ったら、自分に対しては

「否、いいえ」

と言う、その世界です。自分を「否」と言っいなて否定していくと、上から力が来るんだ。自分を主張しているうちは、本当の力は来ない。

「でも、私にはこれだけの才能があります」

なんて、何を言ってるか。何も才能を否定しているわけではない。それを全部自分のものとしては否定すると、神さまは、下さったところの我々の知情意の世界を全部キリストのものとして、質が変わってお使いになる。

福音の世界はいわゆる禁欲ではない。与えられたものが全部、善用されるわけです。それを「靈的」という。ところが、どんなに善いものでも、自分中心でやっているものは、どんなに立派に見えても、それは「肉」という。パウロがはつきり分けた、その「靈・肉」の一番深い分け方はそれなんです。キリストに即することを「靈」という。キリストに反することを「肉」という。

天動説は肉なんです。地動説が靈なんです。だから、地球が太陽の回りをグルグル回っているのは、地球は靈的な動きをしているんだ。その地球上の人間は皆、肉的な動きをしている。自己中心でダメなんです。だから、あのコペルニクスが

「地球が回る」



なんて言い出したら、カトリックで迫害にあつて、そうではないことを言わされて

「それでも、地球は回る」

と言ったけれども、コペルニクスはその先の意味はわかってない。太陽のまわりをグルグル回っているということは、神中心に我々は動かされているんだ。お天道様を見ればそれだけの大きな真理が現れている。

地球は太陽に絶対依存している。我々人間は神・キリストに絶対依存している。それが本当の自由だ。

「他の何者にも依存しない」

ということとは

「絶対者に依存する」

ということでは、これは絶対の自由を持つということだ。マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』に、その角度のことが書いてある。親鸞の『歎異抄』がそうだ。弥陀の本願の劫力で動いている。だから、『歎異抄』と『クリスチャンの自由』は東西の両珠玉編なんです。

「御意の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」

は、

「地の私を通して、我々を通して成つてください」

ということ。「我々を通して、我を通して」を抜かしては困る。

「地にも成らせたまえ」

と言つて傍観的に祈つたつてどうにもならん。この祈りは提身して祈らなければ。

「どうぞ、私をお使くださいー!」

と。それでこの祈りは本ものの祈りになる。キリストはそこまで仰らなかつたけれども、キリストはその角度から自分では祈つていらつしやる。

「御国を来たらせたまえ」

とは聖霊が来ていると、御国は来ているんです。御国は来ている。キリストの力は及んでいる。だから聖霊を受けて御国が来ていると、「御国を来たらせたまえ」が本当の祈りになる。これは今の世界です。現在において本ものにならなければダメです。その現在は永遠なんです。永遠の質を持った現在なんです。それが

「永遠の今」

ということでは

「今、私には御国が来ています。だから、どうぞ、歴史の終わりに、この世の終わりに、新天新地の御国が来てください。早く来てください」

と、この祈りができるわけです。終末的な祈りと現在の祈り、これを

「終末的現在」

という。そういう終末の世界を現在に持っている。キリストが福音を伝えているのも、使



徒たちが伝えているのも、皆この終末的現在でものを言ったり、したりしている。

「直ぐ神の国が来る。ボヤボヤしてるな。結婚なんかする暇はないぞ」

というようなわけだ。パウロのコリント前書7章です。

20世紀は無事に終わるか終わらんか正直わからない、こんな偽りの平和では。とにかく、なんて日本人はダメだろうなと思う。マンガばかり相手にして、電車の中は大人も子どももぶ厚いマンガばかり読んでる。私は

「バカッ、何してるかっ!」

と言いたくなる。マンガにもいいのがあるかも知れないけれども。聖書までマンガになっている。とにかく、おかしな国だ。だから、いよいよ私たちは逆行して動いていないと、本当のものを掴んでいないとダメです。本当のものを掴んだら、この一が百万のゴタゴタに負けないで光っていきます。

●アポストリーリッシュ(使徒的)

だから、キリストが私たちに、

「私がお前の中で光となるぞ!」

「はいっ、受けとります!」

と。これはもう、いわゆる信仰ではない。

「私はまだ信仰がどうも……」

なんて、そんな信仰なんか捨ててしまえ。信仰なんかやってるからいかん。仰いでばかりいる。「しんこう」は信行、信じ行ずる。信交、キリストと信じ交わる。それから、信光、信じ光ると書いたらいい。今までの概念をぶち破って進んでいかなければいかん。

「本当の使徒たちの信交の次元に戻る」

と私たちが言っているのはそのことです。

「プロテスタントでもカトリックでもない。アポストリーリッシュ(使徒的)だ」

と、こないだの詩にも書いたでしょ。あのドイツ語の詩にはドイツ人が実は内容的にもびつくりしているんだ。

「こういう人がいるか」

と、ある音楽家が驚いていた。それは、私たちが使徒たちと同じ次元に入れられて、告白しているからです。皆さん、

「人を助けざるを得ない、救わざるを得ない、この世界に入れざるを得ない」

と、本当に動くようになります。そのために特別集会をやっている。同じグループの人が、ただお互いに集まって、やれ祈禱会だ何だかんだとガタガタやっただけダメなんだ。未開のところ、沢山あるんだから、そういうところへ出掛けて行かなくては。また、そういう人に出つくわして一対一で話さなくては。何と思われたっていいよ。本なんかやったらいい。



「まあ、読んでごらん下さい」と、特にマークしておいて

「これを読みなさい」

と。求める人や苦しんでいる人やそういういろいろな人ですよ。もう他のことで満ち足りている者、そんなものには与えることはない。

「豚に真珠を投げるな」

という。

「満足せる豚よりも悲しめるソクラテスにならない」

という言葉があるとおり。

11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。

「毎日毎日、一日を思い煩うことなかれ」

と、6章の後の方に出ている。

「何を食い、何を飲まんと思い煩うなかれ」

「毎日毎日、神さまからいただいて生きましよう」

と。藤井先生はそういう式の生き方をしていた。藤井先生が亡くなった時に財布にお金が残ってない。借金もなければ、貯蓄もない。藤井全集が出たら、お子さんたちがその印税でもって暮らしたという。矢内原先生がそう言っていた。藤井先生はそういう徹底的な神信頼に生きていた人です。およそ打算のない人だった。その点は素晴らしかった。

私は逢うべきひとに会っていた。藤井先生はその意味で一番の恩師です。とにかく、集会に行く与会人员は12、13人、しかも学生は3人くらいしかいない。あとは未亡人だとか何とか。先生はおよそ伝道はしなかった。文書伝道だけ。けれども、その文字は永遠的な質を持っていきます。

ただ残念ながら、内村、藤井、塚本、みなそれぞれ素晴らしいんだけど、どうしても、聖霊の次元からは、使徒的な次元からは、ずれているところが、また無教会の課題であった。「十字架」一点張りで、「聖霊」のことはほとんど言わない。先生の詩の中の聖霊のところには素晴らしい文句がありますけれども。

● 十字架で徹底的に赦されて

12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

実際の負債のこともあるし、これを免すというので、罪、咎、過ち、そういうことをお互いに免せと。我々、十字架で徹底的に赦されている人間が人を赦せないことがないわけです。ただ、赦しているのに、相手が受けとらなければ仕方がない。受けとらない人は自分で裁きを招いているだけの話だ。

「赦す」



という言葉の、もう少し奥は

「愛する」

ということですよ。赦して、キリストのところへ連れて行くことが愛するということです。何しろキリストと、一つにならないことには救いにならないんだから、しようがない。ただ命題を信じたってどうにもならない。

「たとえばこういうように祈りなさい」

というのが、この「主の祈り」だ。けれども、このたった5、6節の中に福音がそのまま入っている。限り無く展開するところの種みたいなものだ。

神を神とし、キリストをキリストとし、また、キリストと本当に一つになり、そして、このキリストに救われたその救いを、赦しを人に持つていく。その他に何かあるですか。これが祈りの内容だから。さすが、やはりキリストは一番大事なことをピシャツと言ってらっしゃるわけだ。

およそ今の日本はこういう世界からは遠い。今の日本の教育は、制度の問題でも何でも、教師自身の問題です、幼稚園から大学に至るまで。

哲学者でも、西田先生みたいな哲学者、波多野先生みたいな哲学者、特に西田さんは代表的な人だけれども、ああいう哲人がいなくなつたものな。西田幾多郎というのは預言者的な哲人だ。象牙の塔の中に籠もつて、ただ研究しているような哲学者ではないから。私は西田先生の話をたつた一ぺん聞いたことがある。先生は教壇をあつち行つたり、こつち行つたり歩き回る。歩きながら、考えながらものを言つてる。面白い人だ。やはり、あの人は創造的なひとだなと思つた。本当の哲人だ。学者ではない、哲人です。

皆さんも、何をなさつていても、どうぞ証人あかしびとになつてください。

●キリストを食べる

祈入いということ。祈り入る。身体が、全存在がキリストの中に投げ入れられなければならない。

「ぶつ倒れたら、キリストの永遠の腕の中にあつた」

というような祈りでなければ、祈りが祈りにならない。

16 なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容おももちをすな。

「断食」とは何か。断食というのは、ご飯を食べないでキリストを食べること。ただ我慢するのではない。キリストを食べると、ご飯を食べたよりも楽しくなる。キリストは、

「我を食らえ、我を飲め」(ヨハネ6・53～59)

と言われたでしょ。水を飲みながら、

「この水は腹より泉となつて湧きいでる」(ヨハネ4・14)

とサマリヤの女に言われた。だから、

「キリストを飲み、キリストを食べる」



ことが断食の本当の精神だ。それは本当に祈り入るためです。祈り入って、キリストを食べ、キリストを飲むためです。祈りの目的はそこにある。それから、あなた方が個々の祈りを祈りなさい。

「こういうことをしたいんです…」

とか。そうしたら、内容が自己本位でなくなる。

「御名のために、キリストの栄光のために」

ということが出てくる。「ために」なんて言わなくなつて、そう成つて行く。そう成つて来たら、その祈りは聞かれている。ご利益的な祈りではダメなんです。内容は具体的でいい。キリストの中に入ることがだいたい最初の具体的なことだ。一つも観念でない。

私の声は始めはモサモサしてるけれど、だんだん大きくなつてくる。御霊が入って来ると大きくなる。終わりの讚美歌というのは、皆の声も素晴らしくなる。御霊が入って来たら。我々は聖書を聴きながら、聖書を語りながら、聖書の中から聴いて、中から語っているから、お互いさまだんだん力が出てくる。ところが、普通のところでは、

「日曜日に話をする、月曜日はもぬけのからみたいになる」

と塚本先生が私に言っていた。なぜそんなにくだびれるか。聖霊がないからです。日曜日のお話は、先生はなかなか気の効いたことを仰る。私は、今日はずまらなかつたと思うことはなかつたけれども、それは心の満足くらいで、霊の震撼までは来てなかつた。

福音は楽音で楽しくてしようがない。

● 骨肉に身をかくさざる

そういうのが断食なんです。ところが、イザヤ書を見ると、断食とはこういうものだと思つて書いてある。第二イザヤに書いてある。イザヤ書56章から後だ。さすがは預言者の宗教だというわけです。イザヤ書58章6節から、

「⁶わが悦ぶところの断食はあくの縄をほどき、^{くびき}軛のつなをとき、^{しじた}虐げらるるものを放ちさらしめ、すべての軛を折るなどの事にあらずや。⁷また飢えた者になんじのパンを分かち与え、さすらえる貧民をなんじの家にいれ、裸なるものを見てこれに衣せ、おのが骨肉に身をかくさざるなどの事にあらずや。⁸しかる時はなんじのひかり暁の如くにあらわれいで、汝すみやかに癒さるることを得、なんじの義はなんじの前にゆき、エホバの栄光はなんじの軍後となるべし。⁹また汝よぶときはエホバ答えたまわん、なんじ叫ぶときは我ここに在りといひ給わん。」(イザヤ58・6～9)

その通り。素晴らしいところです。第二イザヤも凄い。

「骨肉に身をかくさざる」

というのは、あからさまに助けてあげなさいということなんです。



「なんじの義はなんじの前にゆき」

これは素晴らしい。「義」という言葉が、やっぱり預言者たちには決して観念でないから、「なんじの前にゆき」という、具体的な言い方をする。

それが断食だという。本当に人助けをすることが、福音を生きることが断食だという。これはイザヤが言っている。預言者たちの中には福音がみな隠れている。旧約は隠された福音で、新約は露なる福音です。預言者の宗教は、隠されたる福音です。

19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。20 なんじら己がために財宝を天に積み、

第三イザヤの58章のそういった断食が

「宝を天に積む」

ことなんです。日本人は「貯金、貯金」と大騒ぎしてる。向こう側に持って行けますか？何も向こう側に持って行けない。ある金持ちが

「こんなに沢山たまったけれども、私は結局、向こう側に何も持って行けない。それでは、大いに人のために使おう」

と、それから善いことをしだした、ということがある。金はあつてもなくてもいい、善用すれば。問題は如何に使うかということだ。使わないで、ただ貯めてるやつは、どこかでもって神さまはピシヤツとやつつける。神さまの審判さばきというのは凄い、ちゃんと時にかなっている。しかし、それに気が付けばいいけれど、気が付かなかつたらなおさら悪い。

●アナンケー(ざるを得ない)

この集會に万難を排してでも来てもらいたい人がある。それを、なんだかんだ言つて断る。キリストよりいいものがあるんですか？

「素晴らしい」

という言葉は「キリスト」の他に使うな。本当に素晴らしいのはキリストだけだ。圧倒される。私は圧倒されて生きている。祈つて生きているのではない。

「圧倒されているから祈り入らざるを得ない」

と、これだけの話です。動かざるを得ない、書かざるを得ない、言わざるを得ない。何でもざるを得ないです。「ざるを得ない」という世界に入ったら、これは本ものなんです。それまではダメ。

「どうしようか？ ああしようか？」

なんて、いくらやっちゃってダメ。いくら善さそうでもダメなんだ。「ざるを得ない」は「アナンケー」というギリシヤ語です。

「為ざるを得ない、止むを得ざるなり」

とパウロが言った。



「福音を伝えずば禍わざわいなるかな、止むを得ざるなり」(コリント前9・16)

と。さすがパウロだ。すごいよ、パウロというのは。福音書はもちろん第一だけれど、パウロというのは何と言つても使徒の第一人者だ。人間の中で第一人者はパウロと言つていい。どんな他の者を持つてきたつて、パウロという霊止ひとにはかなわない、人間としては。なぜ、かなわないかというのと、本当にキリストと一つになっているからかなわないんだ。あなた方も、パウロにかなうように、

「パウロさん、パウロさん」

と言つて、兄弟のようになつてください。それはいづれ、そういうことになるから。そういうクリスチャンを要する。その他のクリスチャンは要らない。もう、居ても立つても居られないということになる。その人を通して、すること為すことが全部、神の栄光として現れる。その人の名誉でも何でもない。キリストの栄光として現れる。

そこでは、本当に魂がキリストによつて無とされていなくてダメです。いつも根底においては無とされています。そうでないと、ダメになることがはっきりわかっているから。

● 神眼

22 身の燈火ともしびは目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23 然れど、

なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇
いかにかりぞや。

「汝の目ただしくば」なんて書いてある。この場合の「ただしい」という字は単純であるということだ。双眼でありながら、一眼のごとしという。「目」は勿論、心眼です。心の眼です。この心眼は、もうひとついくと、神の眼、神眼なんです。神の眼となる。キリストはまさにこの神眼のひとつだった。サマリアの女の素性がパッと見えてしまう。

しかし、裁かないよ。助ける。救うんだよ。裁くような目はダメだ。このことは第7章に出て来る。澄んでいるが、慈眼である。恵みの眼なんです。

私は詩の中で相手にするのは、ゲートルとダンテだけれども、ダンテの『神曲』はやっぱ最高だろうね。大変なもんだ。

ゲートルはこの眼のひとつなんです。よく、ものの本質を内観できた。本質をグーツと直観する。太陽が好きで、太陽の光でもつて見る。

「我々の目が太陽の如くでなければ、どうして見ることができるか」

なんて、彼の言葉にあります。ドイツで一番でつかい人物は、やっぱりゲートルなんです。ルターはその土台を築いたひとですけれども。

すごいね、ドイツには、ベーターベンだ、カントだと。ことに18世紀は大変だ。彼らの魂はみんな本当に霊的な世界と直結しています。

ダンテは非常に瞑想の深い人です。だから、星が好きだった。ダンテは星の詩人。ゲール



テは太陽の詩人です。

「昼間はゲーテを相手にし、夜はダンテを相手にし」

と私は書いた。ダンテもゲーテも同じように、勝手に相手にするような者は私の他にいないようです。それは、キリストが来たからできるんです。キリストが来てなければできない。

●大詩人よ、出よ！

その次は、有名なところですよ。

25 この故に我なんじらに告ぐ、何を食くらい、何を飲のまんと生命いのちのことを思い煩わづい、何を著きんと体からだのことを思い煩わづうな。生命は糧かてにまさり、体は衣まきに勝まさるならずや。26 空の鳥を見よ、播まかず、刈からず、倉ぐらに収こめず、然るに汝らの天の父は、これを養やしないたもう。汝らは之よりも遙はるかに優すぐる者ならずや。27 汝らの中たれか思い煩わづいて身の長たけ一尺を加え得んや。28 又なにゆえ衣いのことを思い煩わづうや。野の百合は如何にして育つつかを思おもえ、勞あせず、紡つむがざるなり。29 然れど我なんじらに告ぐ、榮華きわを極きめたるソロモンソロモンだに、その服装よそおいこの花の一つにも及しかざりき。30 今日ありて明日、炉いろに投げ入れらるる野の草をも、神はかく装まい給たまえば、まして汝らをや、ああ信仰しんじゆううすき者よ。

ここに大変立派な花がありますけれども、そこらの野の花を摘んで来て、ここにちよつと置くくらいでいい。こんなのは大変だ、ちよつと福音に相応あうおうしくない。福音というのは、もつとみずばらしい花で、野の花で結構けいこうですから。

しかし、こういうように素晴らしい花を咲かせ給たまう神さまは大芸術家です。神は最大の芸術家です。人間が造つたのではないんだから。

ゲーテという魂は

「神・大自然・我」

というものが融合くわごうしていた。日本にはそういう詩人がいないんだ。

「大詩人よ、出いでよ！」

という、内村先生の文句がある。

内村先生に私は応こたえてやるつもりだ。この福音を受けとって、私としてはそういった表現げんをしないではいられない。これから10年ともう少しかかるかも知れないけれども、最後の仕事です。神の栄光えいこうのために、福音のために。その他の何ものでもない。小池なんて名前なは書かなくてもいい。

33 まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。

「神の国と神の義」

と言うと、何か二つのように思うけれども、一つです。「神の国」も「神の義」も一つ。「義」



は即ちキリストだ。「愛」は即ちキリストなんだ。観念ではない。キリストの在るところが「神の国」なんだ。神の国の実現者なんだ。天国体なんだから、キリストは。天国の体からだなんだ。こういう、乱暴なことを言う人は、牧師さんの中に在るかね。私は何と言われてもいいよ。

ドイツ語の
「グラウベン」(信じる)

という字は「ゲロウベン」という字から来ていて、「ゲロウベン」は、

「レーベン」(生きる)、「ローベン」(讚たたえる)、「リーベン」(愛する)

みんなこれと語幹が同じなんです。これがみんな「グラウベン」という字の元と同じなんです。「信ずる」も「愛する」も同じこと。信じるというのは、

「いかに私たちをかくも救ってくださったか」

と、キリストを全存在で受けとることを「信ずる」という。信ぜしめられる。圧倒されて、信ぜしめられる。全部、これは受け身です。私が勝手に信じたのではない。皆さんも、そこに追い詰められて、ざるを得ない世界に入ってしまう。文句ないでしょ。

「私はまだ信仰が…」

なんて、何を言ってるか。自分の信仰なんか考えているから、「まだ信仰が…」なんて言うんだ。「まだ信仰が」もヘツタクレもない。

●一日を永遠として

³⁴この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

一日を永遠として生きろ、一日を一生として生きろということ。内村先生の「一日一生」という言葉はそこから来ている。一日を本当に生きたひとは、百年をいい加減に生きた人よりも、本当に生きたひとだと、こういうわけだ。

まあ、福音の世界は有り難くて、嬉しくて、輝かしくて、しょうがない。それを何か、しゃつちよこばった難しいものにしてしまったりするものだから、皆が

「キリスト教はゴメンだ。活動写真も見れない」

なんて言う。いいよ、活動写真(映画)を見たって。何を見ても、そこから福音をつかんでしまう。福音というのは、何を見ても、何を聞いても、楽な、おおよそ制限のない世界なんです。一切を包摂してしまう。そして、全部溶かしてしまう。闇を光に変えてしまうように、霊的变化を起こさせてしまう。だから、ただ

「信仰だ」

とか、ただ

「十字架だ」

とか言ってみたってダメなんだ。



「ギリシヤ語、ヘブライ語が、ここがこうだ、ああだ」と、重箱の隅をほじくるようなことを、

「聖書の研究だ」

なんて言ってるやっつていいる。私はギリシヤ語、ヘブライ語の根本精神をつかむのは負けませんよ。それはその奥が読めて来るから。私はイスラエルなんかほとんど行かなくても、イスラエルに住まなくなつて、旧約聖書を原典でジーツと読めばその奥が見えて来る。あなた方も日本語で奥が見えて来るよ。いいよ、ギリシヤ語、ヘブライ語を知らなくたって、一向に差し支えない。文字の奥の響きが聞こえてくる。それは本ものです。聖霊がそれを為し給う。聖書もまだ次元の低いところもある。そんなのはもつと高めて読むことができる。とにかく新約聖書はすごい。旧約にはいろいろ段階がありますから。新約聖書なんて、よくもまあ、こんな素晴らしいものが書けたかと思うね、正直。これは絶対に思想ではない。思想は人間を本当に動かすことはできない。動かすことのできるのは福音だけです。世界思想家なんていくらあつたつて、人間はひとつも変わりはない。思想だつて文化的なある役割は果たしますよ、けれども、もうひとつの奥の世界になると、どうにもならん。

●ベアトローベンの祈り

ベアトローベンの言葉で、私の一番好きな言葉を紹介します。彼が、もう聾者になつて、あの時は自殺しようと思つた。けれども、思い止まつた。そして、それから、世界を動かすような作品ができた。自分の耳では聞こえない。第九シンフォニーだろうと皆そうだ。彼は霊で聞いている。それだけのものがなければ、勿論あんな曲はできっこない。

「まことに苛酷な宿命が私を打った。だが私は運命の意思に自らを委ね、神に常にただ懇願する。私がおこの地上でこの生において死の苦しみに耐えねばならない限り、欠陥から守られるように、神がその神意を動かしてください。然らば、このことは、私の運命がどんなに苛酷であり、おぞましくあろうとも、至高者の意思にゆだねて宿命に耐えるだけの力を私に与えて下さるであらう」

それでどうとう彼はこれに耐え抜いて、神さまの意思に従つて、聖意みこころに従つていった。彼は、「かわいそうな人たちのために自分は音楽をつくるんだ」

という祈りをもつて、第九シンフォニー、そして第十シンフォニーまで考えていた。これは十字架のキリストらしかったね。世界に本当の喜びを伝えようというわけで、彼はあの不朽の名作をつくつたわけです。『第五』も『第六』も『第九』もそうだし、それから、素晴らしいクヴァルテットがあるそうだね。私はベアトローベンのことを歌った詩を書いた。

「彼は孤独であつたけれども、その心は火のように燃えていた。そして、すべての人を本当に友とした」

と。ダンテも苦難に遇つて、そして流浪の旅で、彼の『神曲』天国編の十八歌か何かに、



「今の葡萄園はしょうがない葡萄園だ。自分はこんな、普通の教会の、葡萄園の中には入ってられない」

というようなことを書いています。

「自分は一人一党だ」(天国編十七歌)

という言葉がある。

「我らすべての軍勢を照らす太陽に印されたる如くこの者に勝つて望みを抱くいかなる

子ども戦闘の教会は有していない」

これが最も戦闘的な男だと、それで「一人一党だ」という。

「流浪の旅をしていて人から貰うパンを食べるのがいかに辛いものか」(天国編十七歌)

という言葉もあります。けれども、ダンテにしる、ベアトリーベンにしる、皆キリストに神さまにしがみついて祈って生きてたひとたちです。

今回の第6章のところの中心は、何といつても、その「祈り」の事態なんですけれども。

キリストは何よりも祈りのひとであった。ということとは、ただ祈っているのではない。祈りのひとというのは、神さまの中に祈入して、神さまとの交わりをしていたひとということ。それでは、キリストには力が来ない。

「我、何事をも為しあわず。神さまがさせているんだ」

と。その神さまがさせている力は祈入しているから来る。祈り入ると、いつも神さまのところへ帰っているから。帰り入っているから。祈入しているから。預言者がみんなそうです。

「エホバのもとへ帰れ、帰れ」

と言っている。磁石が北を指すように、私たちの魂は自然にキリストを指しているか。そして、吸い付けられているか。これはもう、御霊が来ていれば必ずそうである。

「主様!」

と、自分のはらわたの中で無言の叫びをしてごらん。直ちに、その世界に入るから。どういふところにおいても、どういふ瞬間においても、

「主様! キリストさま! あなたと一つです。有り難うございます」

と叫ぶ。グーッと力が来て、圧倒される。それも、キリストの十字架、聖霊、復活の生命を瞑想すれば圧倒されているから、もう、「主様!」と言わざるを得ない。

福音書は破ってポケットに入れておきなさい。どこでも読んだらいい。それで、「主様!」だ。少し気違いにならなければダメですよ。

「あいつは、いつも何か、電車の中でも見ているなあ」

「それは福音書だ」

というわけです。

